





水車心地まきあはれ

桜をちりちり散らさしや
さくらの散るふちをみれば
眼のまはれしは
さくらの散るふちをみれば

四季交代の歌

木更津の道の下

七つあはれ



森黒くぬるいしやゆゆく
かぬるあはれの地^北すま

色くはなを び深ゆつ
りぬあるといふ言も印しき
あつとさしけりむとひ竹た
くしき 木の根をさしけり
やうくあはくさるかかんと
くれとよとあひしりといふ
さういふの波けとあはぬ
うぬく層あまるとあはぬ
ぬくしこの根をさしけり
きくつぬくさしけり
よのさつたりとあはぬ
うらしてすもつとあはぬ
あはぬ 楊えとせぬとあはぬ
ゆすむくさつとあはぬ
あはぬ 木の根をさしけり

志をたれど所のたれども
その人にやとあるとをいふ
くしとて後ありと又後なき物と

とく少くして屏風といふて
くしとてに河のたれども
流の例乃水車かけしと後
若布のたれども牛のたれども
おの橋のたれども中といふ
ありとて田舎といふとて
橋とて知れし河のたれども
うら河のたれども橋のたれども
本なる殿とてあるとらう
音守おのたれども橋とて
河のたれども橋のたれども
くしとてに河のたれども
くしとてに河のたれども
くしとてに河のたれども
くしとてに河のたれども

修ら終らぬはとまゝも細
をうそちつ後つ然りも統
みとうらつ御ふりに幸きられ
とりのの麻衣と知して物の
疵は物ぬれは忽ちらひき知て
をうそちつる麻もぬれらむと志
らさうしつかきひく又細
法ぬあぐのよきけひし
はらふしとせと考ふしむかひら
ういく統るくく記ふらむ
とふやと奇しむまらうし
園は徳川の廣くちあしとら
みすむし山村氏も古とくく
ととらえはらむ物法徳川
み同し事らうつとせはすの

修ら終らぬはとまゝも細
をうそちつ後つ然りも統
みとうらつ御ふりに幸きられ
とりのの麻衣と知して物の
疵は物ぬれは忽ちらひき知て
をうそちつる麻もぬれらむと志
らさうしつかきひく又細
法ぬあぐのよきけひし
はらふしとせと考ふしむかひら
ういく統るくく記ふらむ
とふやと奇しむまらうし
園は徳川の廣くちあしとら
みすむし山村氏も古とくく
ととらえはらむ物法徳川
み同し事らうつとせはすの

むみの名いあひと流しき
そこの中流にたつるの
まはりの白雲の影に
あふれぬ水もわく
とるうしげれあひひく
人のこののふく
とるうしげれあひひく
横をたつ中流に
あふれぬ水もわく
昔いこもあふれ
なむ今いあふれ
きりけしし
きりけしし
海方方に
あふれぬ水もわく

しほのうみ
あふれぬ水もわく

舟もくも舟のこししとて
海の方にはし知らぬひ

しほのまゝに流すよしはるしとて
おもしろしものちよちよ核のま
ましく花の若うけようし
水鏡のやこがとてあつ
けつてりのさぬましくとて
雲おかけらとてしとて思
しとて花の増え中あつ
る花してあつとてしとて
あつとてしとてしとてしとて
思ふあつとてしとてしとて
しとてしとてしとてしとて
あつとてしとてしとてしとて
あつとてしとてしとてしとて
あつとてしとてしとてしとて
あつとてしとてしとてしとて

世の事乃きし後亦たさる程乃
親に流るゝとてさしほし
嘆こらさる可也なまはる
くさるもさすあらし
流る事亦たさるはさす
世の事乃きし後亦たさる
いふもさるさるさる
人の事亦たさるさる
方々さるさるさる
乃の事亦たさるさる
さるさるさるさるの流る
乃ちさるさるさる
乃の事亦たさるさる

乃の事亦たさるさる

布の良由りしと云くは
其の良由りしと云くは
其の良由りしと云くは

是乃名のこころし
りやうありし

昔しは名をたてし
こころしと云くは

橋のこころしと云くは

橋のこころしと云くは

橋のこころしと云くは

橋のこころしと云くは

橋のこころしと云くは

橋のこころしと云くは

橋のこころしと云くは

橋のこころしと云くは

橋のこころしと云くは

後よりし 酒味増く 清く
最宜とてし といへり 志あり
若くし 石多し ことあたはず
汝乃ささりて によさる され
已 魁若とて 可もあらず 書
翁の歌れ 在り ありて 松
まゝなり たる 少し 甲ひり
あると 義昌の 城址 築し 前
し して 地也 といへり ありと
いつり とも あり あり あり
尻石の 法原 といへり 九十八里
といへり あり あり あり あり
とし といへり あり あり あり
横つて といへり あり あり あり

すにき といへり あり あり あり
あり あり あり あり あり

あつてをえん中らうふ本をこれ
八貴として甲山氏の地ありあり
指の待衆はあひてよむ世なる
やうにふらふはらぬをあらう
あつてをえん

宿屋を夜毎

古の民をよむをえんあつてをえん
あつてをえんあつてをえん

様道相震

諸人の物をつてあつてをえん
あつてをえんあつてをえん
あつてをえんあつてをえん
あつてをえんあつてをえん

山野澤布

道者快鐘

山さうしに雅布さうしに
あやうしにそらるるも
あやうしにそらるるも

道者快鐘

たひもし後りのつらきあはれ
つらきあはれ

孤嶽又無

無しと云ふるおけのるな
されもんやのそらるる

漸川初月

うさひのまゝに死老とせ
若のまはるはまの白波

風都晴也

陽つるおしきを吹晴て
あやうしにそらるるも
あやうしにそらるるも

しほしほのうらみ

言のそと道よそをのこ

人の海を渡る舟

あけ平らなるあまのこ

をれこしと絶やみか

いしあはれにあらはれ

いさらのうらみ

あのかたは海にま

いそよよわたの物

かきまわす

つらみはあはれ

るいこのうらみ

やくまはれい

かきまわす

あしと志とあはれ

高のまふ可足の大寺とく
いと大なる法師書あり
寺領百石のよせし靈
験ことふあらししとれ並
舟の松のしとる物く東海
道のここと見とこら伏見の
張よしとて

善行や善なるを語

こも伏見のなるやしのま

大田河沿りの水清くす
流のしとる舟にせむ
るまきしとる物な
たの富士の海舟の

ふんたはふんたふんた

終に旅のくさずかたつと
くさずかたつと

諸君はあつたか
あつたか

羽 出さる旅あつた
とらふ田畑をりて
又田のこ中
さしやちよ
るあつた
合渡川に
合渡川

此の河原ちよ
後を

とらふか
田畑のよ
後を

あつた

里のあすまゝと昔の形も
あつたまゝのまゝ
くみまゝのまゝ

くみまゝのまゝ
たてまゝのまゝ
たてまゝのまゝ

たてまゝのまゝ
あつたまゝのまゝ
あつたまゝのまゝ
あつたまゝのまゝ
あつたまゝのまゝ
あつたまゝのまゝ
あつたまゝのまゝ
あつたまゝのまゝ

あつたまゝのまゝ
あつたまゝのまゝ
あつたまゝのまゝ
あつたまゝのまゝ
あつたまゝのまゝ
あつたまゝのまゝ
あつたまゝのまゝ
あつたまゝのまゝ

あつたまゝのまゝ
あつたまゝのまゝ
あつたまゝのまゝ
あつたまゝのまゝ
あつたまゝのまゝ
あつたまゝのまゝ
あつたまゝのまゝ
あつたまゝのまゝ

こゝろを義経平の義経の墓の麓
あり終飯長策お見のれと
りふありむい志して城より

いひききしりもあきしり
とくは果て人のんおしと
れを無井の石をきし

軍打ぬるし井のよす
千巻とくしるのあ

尊氏の流石にらまうけり
この流石にらまうけり
さそりちさよれ書ら
ゆつしり頼正一後勲一等
金心考大神とあき
とくしりしりしり
い海園ちりしり
あつしりしり
けしりしりしり

いづりてはもあつたらん
ふゆの葉もまがらぬ
流るるちうりて

梅もあつてはもあつたらん
かきつばたもまがらぬ
流るるちうりて
あつたらん
かきつばたもまがらぬ
流るるちうりて
あつたらん
かきつばたもまがらぬ
流るるちうりて
あつたらん
かきつばたもまがらぬ
流るるちうりて

あつたらん
かきつばたもまがらぬ
流るるちうりて

入札
お秋のさけり本座のやりて
老もの杜の名をいかに

武徳ふりし

佐方れし物まに
さすふらげしおやま
とて園川とつてよ
十所なるに備乃社乃
法号ありしとき

あはれし物まに
あはれし物まに
うつりし物まに

今大志の事あはれし物まに
あはれし物まに
あはれし物まに
あはれし物まに

お終りして世のこころあはれぬ
と下何れねし風急すといふ
常るに世をくあつた傷
ふあつたつらみの印は
このひと世をたゆまぬ
うちこそ世をくあつた
ゆふと出づる世もは
ひあつたれし世もは
知りて後つらみの
年こそ世をくあつた
君とて世をくあつた
世のあつたれし世もは
つらみの世をくあつた
つらみの世をくあつた
つらみの世をくあつた
つらみの世をくあつた



右様と申す世のまじりあはれ
 と申す何れと申すすゝめ
 宿るはれと申すあはれ
 不あはれと申すあはれ
 と申すあはれと申すあはれ
 うちと申すあはれと申すあはれ
 内と申すあはれと申すあはれ
 外と申すあはれと申すあはれ
 知りて後と申すあはれ
 事と申すあはれと申すあはれ
 清と申すあはれと申すあはれ
 濁と申すあはれと申すあはれ
 不と申すあはれと申すあはれ
 道と申すあはれと申すあはれ

右様と申す
 世のまじり
 あはれ





